



まだ瓦礫が散乱する八代市の県道を走る給水トラック＝8月10日、筆者撮影

「能登の恩を熊本へ」 令和8年熊本地震で 給水ボランティア再始動

7月28日に熊本県で発生した最大震度7の地震は「令和8年熊本地震」とされ、2016年の熊本地震とはまた違った被害と衝撃が広がった。ショッピングセンター「イオンモール熊本」での爆発事故や製紙工場での煙突倒壊、そして酷暑日を含む猛暑の中での避難生活…。特に断水の長期化によって被災者は過酷な状況に追い込まれている。そこで、2年半前に「水不足」を経験した令和6年能登半島地震・奥能登豪雨の被災者らが、熊本にタンクで水を届ける給水ボランティア活動を始めた。当時の教訓を踏まえた活動の様子を紹介したい。

◆能登では4カ月間、毎日交替で水タンク運び続ける◆

熊本県のまとめによると、今回は県南部の八代市や氷川町を中心に最大7万9100戸が断水。発生1週間後には約4万4000戸に減ったが、浄水場や配水管の被害が大きく、県内全域での断水解消は8月末と見られている。国土交通省や自衛隊、各地の自治体などが給水車を派遣しているが、暑さによる水需要の多さもあって追い付かない状況が続く。

これに対して、能登の被災者らで結成された一般社団法人「能登乃國百年之計（のとのくにひゃくねんのけい）」が、2024年9月の奥能登豪雨での断水地域

で活用した1トン（1000リットル）の給水用タンクやトラックを、熊本でも活用するため乗り出した。

能登では浄水場や取水ポンプ場が被害を受けた石川県珠洲市北部で、福島県の関係者から提供を受けた水タンク約15基を2024年10月から順次、集会場や個人宅に設置。全国各地から駆け付けたボランティアが翌25年1月まで毎日交代で給水車を運転し、10キロ以上離れた給水地点でタンクに水を満たして各所を回り、給水とともに住民の安否確認も行った。